

ロンドン万博から大阪・関西万博へ：万国博覧会史私見

再来年開催予定の大阪・関西万博を間近にひかえ、関連ニュースの報道を耳にする機会も多くなってきました。この報告では、定年退職も視野に入ってきた報告者が細々と勉強し続けてきた万博の歴史について、私見を交えながら雑感的なコメントをいたしたいと考えております。したがって、学術的貢献をともなう最新の研究成果の報告ではないことを、遺憾ながらおことわりしておきます。

日本でも京都を中心とする「万国博覧会と人間の歴史」グループが、それまでの研究成果を引き継ぐかたちで多角的な研究成果を公表していますが、それらもふくめて、これを機に万博を1851年ロンドン万博（あるいはそれ以前の各種の催し）にさかのぼる歴史として捉え直す動きとなっています。そのさい、来たる大阪・関西万博をどう展望するかにあたって重要な論点となるのが、それぞれの催しの性格に基づく万博史の「区分」ではないでしょうか。同万博については、とくに資金集めや会場準備の遅延など、どちらかといえばネガ面によった内容の報道も多いようですが、その大元にあるのは「もはや万博の時代ではない」という、ある時期以降に共有されるようになった想定です。では、ある時期とはいいつからのことなのか、だとすると、万博の「黄金（全盛）時代」という時期区分もあるのか、あったとすると、なにゆえに万博がそう位置づけられていたのか。そのあたりのことを、これまで提起されている万博史区分の内容も参考にしながら、お話ししたいと思います。

ある程度の時期内の諸万博を、それらの特徴と内容をふまえながら、特定の表現で特徴づけることは、もちろん長い万博史を鳥瞰し秩序的に理解するためにはとても有効ですが、しかしそういった表現では括りきれない特異な性質を持った万博もけっして少なくありませんでした。1970年大阪万博の空前の「大成功」のあと、石油危機等の経済情勢も背景に、長いこと万博が開かれませんでしたので、同万博をもって一つの区切りと見ることもできます。その後の万博が催しとして新しいフェイズに入っていたとすると、共通した流れも見えてくる一方で、やはり特異性の方が際立つ催しも少なくありませんでした。ここでは、そのような事例として、上海万博（2010年）やミラノ万博（2015年）の特徴的性格についても言及したいと思います。

報告者は、しかし、もっぱら1851年ロンドン博を中心に学んできましたので、それ以降の催しについては素人知識の域にとどまります。かつての大阪万博と同じように、1851年博も大成功の催しでした。しかし、この万博についても開催にたいして様々な懐疑や反対の声寄せられていたことも事実です。反対の理由のなかには、この万博に固有の事情に基づく

ものもありましたが、その後の万博でも（そして今に至るまで）共通するような内容のものもあります。これは上記の万博史区分を考える上でも有用な情報となるかもしれませんので、余裕があれば少しく取り上げるつもりです。